

E. フロムの「愛」の概念と個人の尊厳

— アダムとイヴの物語と宗教改革の「疎隔」の視点から —

E. Fromm's concept of "love" and personal dignity

— From the perspective of Adam and Eve's story and the "separation" of the Reformation —

佐藤友梨

Yuri SATO

はじめに

アダムとイヴにとって、楽園追放とは一体何であったのだろうか。旧約聖書《創世記》2－3章によると、アダムとイヴは労苦や悩みなくエデンの園に住んでいたが、蛇の誘惑により食すことを禁じられていた知恵の木の実を食べてしまった。

蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。(創世記3：4－6、新共同訳)

アダムとイヴが食してはならないと禁じられていた知恵の木の実を食べたという、この人間が神の命に背いた物語は、キリスト教世界において原罪という概念と共に長く語り継がれてきた。アダムは人類の始祖とされ、彼らは自らが犯した罪故に楽園を追われ、人類は「原罪」を背負うことになった。

しかし、ユダヤ教はキリスト教とは異なった物語解釈を行う。そこでは、神の恐れと人間の成長という、絶対者たる神と矮小な人間という物語の前提とは全く異なる解釈がされてきた。神は、知恵の木の実を食べたアダムとイヴを恐れた。何故なら、神と、知恵を得たアダムとイヴとを隔てる事柄は、ただ永遠の命を生き得るかそうでないかということのみであるためである。そして、園の中央に生えている命の木の実を食べれば、その差異さえも凌駕されてしまう。そのことに恐れと嫉妬を覚えた神は、二人が永遠の命を得ることがないように楽園から追放した。そして、二人が二度と楽園に踏み入ることがないように「回る炎の剣」とケルビムを楽園の入口に置いたのである¹。さらには、この過程を成長の一過程であると解釈し、肯定的に捉える伝統さえある²。神への反逆以前、アダムとイヴは神に絶対的に服従していたが、知恵を付け、自我が芽生えたことにより、何の疑問もなく神に従うということができなくなった。これは何も罪な

¹ Fromm, Erich. *You Shall Be As Gods*, New York: H. Holt, 1991 [1966]., pp. 87-88. = 『自由であるということ』飯坂良明訳、河出書房新社、2010、117-118頁。

² Magonet, Jonathan. *A Rabbi reads the Bible* / 2nd ed, London: SCM, 2004, p. 124. ここでは、ある時点で子供が両親から独立しなければならないという意味での成長を意味している。

どではなく、健全な成長時に誰しも経験する自律の過程である。このように、ユダヤ教的解釈によって楽園追放が語られる場合、成長や自律といった肯定的な読みがなされるのである。

エーリッヒ・フロムもまた、楽園追放を成長過程の一つと見做す解釈を行なっている。特に注目すべきなのは、それがメシア概念と深く結びついていることである。楽園時代の神との完全な調和が追放によって失われるが、メシア時代には「新たな調和」³が得られるというのである。前稿「偶像崇拜の否定と神礼拝—E.フロムの疎外から和解への展望—」において、フロムの言うメシア時代が「戦争・迫害・搾取の終わる平和な時代」⁴であることを示唆した。アダムとイヴの物語から、両者が向かい合った時に愛し合っていないことが、そこから生じた疎隔が誤解や軋轢を生み、他者との一体感が得られず、人類は疎隔から逃れるために権威主義的体制に服従して行ったことを述べた。それが争いの起源となったのである。しかし、前稿の問題はアダムとイヴという個人と個人の問題を、民族間の戦争という大きな枠組みに結びつけたことである。フロムの解釈を考察する場合、アダムとイヴという個人間の関係性により注目すべきである。そのため、本稿ではアダムとイヴの物語を、個人という観点から考察していく。

1. 問題の所在

本来、フロムの解釈におけるアダムとイヴのエデンの園からの追放は自然からの離脱と捉えることが妥当である。それは以下から読み取れる。

とはいえ、ひとたび自然から引き離されると、もう戻ることはできない。ひとたび楽園から、すなわち自然と一体化していた原初の状態から追い出されてしまったら、戻ろうとしても、燃える剣をもった天使たちに行く手を阻まれてしまう⁵。

このように、楽園は人間が自然から離れる以前を象徴しており、楽園追放は原初からの離脱とフロムが解釈していたことが伺える。

しかし一方で、ここでフロムが問題視しているのは、個性化という点であるとも考えられる。二人が神の戒めを破って禁断の木の実を食べてしまった後、神から「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」(創世記3:11、新共同訳)と弁明を求められる。アダムは、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」(創世記3:12、新共同訳)と言い、神が自分に与えたイヴがその木の実を自分にくれたのだからイヴが悪いと主張する。そして、イヴは「蛇がわたしをだましたので、食べてしまいました。」(創世記3:13、新共同訳)と言い逃れ、蛇に罪をなすりつけようとする。フロムによれば墮落物語における悲劇は、楽園追放そのものではなく、アダムとイヴの意識が切り離され、孤立した存在として互いに向き合ったことであるという⁶。

彼らが互いに愛し合っていないことは、相互の態度に暗示されている。つまり、イヴはアダムを守ろうとはしないし、アダムは罰を免れるために、イヴを罪を犯した者として弾劾し、彼女を弁護しよう

³ Fromm, [1966], *op. cit.*, pp. 122-123. = 訳書、165頁。

⁴ 佐藤友梨「偶像崇拜の否定と神礼拝—E.フロムの疎外から和解への展望—」『西南学院大学大学院研究論集(8)』31頁。

⁵ Fromm, Erich. *The Art of Loving*, London: Thorsons, 1995 [1957], p. 6. = 『愛するということ』鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991、22頁。

⁶ Fromm, Erich. *To Have or To Be?*, New York: Bloomsbury, 2015 [1976], pp. 105-106. = 『生きるということ』佐野哲郎訳、紀伊国屋書店、1977、170頁。

とはしない⁷。

ここで問題となるのが、フロムが人間の個性化という問題について言及する場合、特に西欧社会における中世封建社会の崩壊を中心的に取り上げているということである⁸。そのため、アダムとイヴの物語を個性化の問題から考える場合、中世封建社会の崩壊と関連付けることが妥当であると思われる。現に、『自由からの逃走』（1951；原著1941）において「たやすく自己を服従させようとするこの傾向は、実際には、プロテスタンティズムによって準備された」⁹とフロムは述べており、ドイツ・ナチズムに容易に服従し個人であることを放棄した大衆の要因を、歴史の前段階である宗教改革時代に求めている。

2. アダムとイヴの物語と宗教改革

2-1 中世的体制の調和

エデンの園の物語も、フロムの文脈でいけば権威主義的であるが、フロムはそれほど激しい批判を行っていない。それは、フロムがエデンの園での神と人間の関係を「本源的調和」¹⁰と述べていることから読み取れる。それと同様に、中世的体制で特に権力を握っていた教会を「人間の尊厳や意志の自由や、また人間の努力の有効であることを強調した。」¹¹と評価していることから、一見権威主義的な中世的体制に対しても否定的ではない。また、中世社会が人間を束縛したことを認めつつも、「その束縛は、後の世紀における権威主義や圧迫がおこなったものとは違っている。」¹²と述べており、中世と近代における権威主義に対して明らかに異なった評価を下している。つまり、中世社会と権威主義的と評価を下しつつも強い批判を行っていないのである。けれども、ドイツ・ナチズムを始めとした近代の権威主義的体制に関しては「新しい偶像崇拜」¹³と呼び、徹底的に批判している。フロムの著作は、これら権威主義的体制への攻撃に偏っていると言っても過言ではない。事実、フロムの言説で特徴的なのは、権威主義（authoritarianism）と人間主義（humanism）の対照であるが、圧倒的に権威主義への言及が多い¹⁴。この偏りは、新しい偶像で

⁷ *Ibid.*, p. 109. = 訳書、170頁。

⁸ 人類の初期段階のアダムを、フロムは『破壊』（1975；原著1973）において考察しているが、ここでは人間の攻撃性や残酷性がどのように生じたかについて生物学的特性から検討しており、個性化について直接的に言及することは稀である（Fromm, Erich. *The anatomy of human destructiveness*, New York: Holt, 1973, pp. 187-192. = 『破壊：人間性の解剖上』作田啓一・佐野哲郎共訳、紀伊国屋書店、1975、257-265頁。）。そして、この人間の攻撃性に関する考察は最終的にヒトラーが象徴するドイツ・ナチズムへと辿り着くため、これらのフロムによる生物学的考察がファシズムとホロコーストの文脈から生じていることは明白であろう（*Ibid.*, pp. 411-481. = 訳書下、593-703頁。）。近代における人類の大量殺戮を、人類の初期段階に求めようとするこの試みは、「多くのレベルで魅力的で説得力はあるものの、十分な生物学的根拠を欠いて」おり、（Burston, Daniel. *The legacy of Erich Fromm*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991, p. ix. = 『フロムの遺産』佐野哲郎・佐野五郎訳、紀伊国屋書店、1996、10頁。）フロムの著作全体の中では周辺的な役割しか果たしていない。また、近代におけるファシズムやホロコーストの問題の要因を、原始社会に求めるのは時代が掛け離れすぎていると言えよう。宗教改革—近代という歴史の過程こそが、フロムの解釈における個性化の在り方を決定付けたものであるということは、以下から読み取れる。「個人がその原始的な絆から次第に脱出していく過程は—それは「個性化」の過程とも言えよう—宗教改革から現代までの近代史において、その頂点に達したと思われる。」Fromm, Erich. *The Fear of Freedom*, London: Routledge, 2001 [1942], p. 20. = 『自由からの逃走』日高六郎訳、東京創元新社、2013 [1951]、34頁。

⁹ *Ibid.*, p. 95. = 訳書、127頁。

¹⁰ Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 71. = 訳書、95頁。Cf. Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 28. = 訳書、43頁。Fromm, [1963], pp. 166-167. = 訳書、126頁。

¹¹ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 63. = 訳書、81頁。

¹² *Ibid.*, p. 36. = 訳書、54頁。

¹³ Fromm, Erich. *The Sane Society*, London/New York: Routledge, 2002 [1956], p. 230. = 『正気の社会』加藤正明・佐瀬隆夫訳、社会思想社、1958、267-268頁。

¹⁴ Fromm, [1942], *op. cit.*, pp. 122-152. = 訳書、159-197頁。Fromm, [1950], *op. cit.*, pp. 34-37. = 訳書、45-48頁。

ある権威主義的体制を排撃することこそが、人間主義への道であるというフロムの主張の表れであろう¹⁵。それほどまでに、権威主義への排撃に筆を割きながら、自らが「権威主義的宗教精神で書かれている。」¹⁶と評価したエデンの園の物語や、中世的体制を攻撃しないのは何故であろうか。それは、近代の権威主義的体制が個人の尊厳を認めないのに対し、中世的体制は認めていたとフロムが解釈していたためである。

まず、アダムとイヴの物語と中世封建社会は、他者との一体感で満たされていた点で共通する。フロムはアダムとイヴが世界（他者、神、自然）との一体感で満たされていた関係性や、それに伴う幸福感を「本源的調和」¹⁷と呼んでいたと考えられる。このような一体感を、フロムは母親と乳児の関係に譬えて言い表す。

乳児 (infant) 期、「私」なるものはまだほんのわずかししか発達していない。まだ母親と一体 (one) であると感じ、母親の存在がある限り孤立を覚えることはない。母親の乳房や肌などに肉体的に触れることによって、その孤独感は癒される¹⁸。

ここでは、エデンの園におけるアダムとイヴが、自意識が互いを隔離することなく他者との一体感で満たされる様が描かれる。彼らは自由を持たなかったが、乳児のように、自由がないことに対し何ら不自由を覚えなかったのである。

一方、フロムが特に強調している中世封建社会の特徴は「個人的自由の欠如」¹⁹である。人間は社会的秩序の中で自分の役割に繋がれており、個人が自由に活動する余地はなかった。しかし、生まれたときからすでに明確に固定された地位を持ち人生の意味を疑う必要はなかった。人間存在が、社会全体の構造の中に根を下ろしていたのである。ただ社会的役割という点でのみ自分の存在を意識していたため、「自分自身を他人や世界と分離した存在として考えるような意識」²⁰はまだ十分に発達していなかったのである。確かにそこに近代的な意味での自由はなかったが、個人的には第一次的紐帯を断ち切られた状態であったとしても、社会的には未だ第一次的紐帯で結ばれていた。社会は人間を束縛したが、社会秩序の中で明確な役割を果たせば安定感と帰属感が与えられ、孤立することはなかったのだ²¹。

このように、アダムとイヴの物語と中世封建社会は、近代的な自由は欠如していたが、人間が世界（他者、神、自然）との一体感で満たされており、決して孤立して孤独ではなかったという点で符合していると言える。

2-2 調和の崩壊

しかし、このような「本源的調和」²²が永久に保たれることはない。蛇に唆されたイヴは、知恵の木の実を食べ、アダムもそれに倣ってしまう。神はアダムとイヴをエデンの園から追放するだけでなく、園の東にケルビムと回る炎の剣を置き、二人が園に戻れないようにした（創世記3：24）。アダムとイヴは、

¹⁵ Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 49. = 訳書、64頁。

¹⁶ Fromm, [1950], *op. cit.*, p. 42. = 訳書、54頁。

¹⁷ Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 71. = 訳書、95頁。

¹⁸ Fromm, [1957], *op. cit.*, pp. 8-9. = 訳書、26-27頁。訳書は“infant”を「幼児」と訳出しているが、母親の乳房への肉体的接触について言及していることから、まだ母乳の必要な生後一年頃までの時期の小児を指していると解釈し「乳児」と訳出した。

¹⁹ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 34. = 訳書、52頁。

²⁰ *Ibid.*, p. 36. = 訳書、54頁。

²¹ *Ibid.*, pp. 34-37. = 訳書、52-55頁。ロマン主義者としてのフロムは、中世封建社会を黄金時代と捉えており、社会・経済・人間の在り方について批判的に吟味することはない。本稿では、フロムの歴史観の歪みについては触れず、このような歴史観によって示されるフロムの思想を検討する。

²² Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 71. = 訳書、95頁。

個人としての意識が芽生えたばかりである²³。この過程を、フロムは乳児から幼児への成長に譬えている。

ところが、孤立感や個人としての意識が大きくなるにつれて、しだいに母親がそこにいるというだけでは満足できなくなり、別の方法で孤立感を克服したいという欲求が生まれる²⁴。

自意識が芽生え、自らを個人として意識し始めると、ただ母親に依存する形での一体感では満たされなくなる。母親から与えられる一方向的で直接的な関係では飽き足らず、芽生えた自我により自己主張を始め、幼児は母親を悩ますようになる。これはまさしく、自我が芽生えたことにより、アダムとイヴが互いと、そして自分たちを支配していた神と従来との関係では心満たされ得ない様と符合する。仮に満たされていたのであれば、アダムは知恵の木の実を食したことをイヴのせいにしていないであろうし、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が」（創世記3：12、新共同訳）などと言って、暗に神を責めようとはしないであろう。完全な調和が破られ、各々の関係に亀裂が入ったのである。

一方、中世封建社会は、その末期に経済や文化が発展し、社会機構が大きく変化することになる。フロムはルネサンスのイタリア人を「最初の個人」²⁵と呼んでいるが、それは地理的な位置による商業的な利益があり、工業発達にとって重要な技術が、ヨーロッパのどの地域よりも早くイタリアにもたらされたからである。その結果、創意と野心に満ちた有産階級（bourgeois class）が発生した。これに伴い、封建的な階級は次第に重要性を失っていき、生まれや家柄よりも富が重要になっていった。資本や個人の経済的創意や競争が重要になり、かつて社会組織が与えていた地位や階級、生活の固定性や安定性が破壊された²⁶。このように、中世的社会機構が次第に崩壊した結果、近代的な意味での個人が出現した。人間は、自己や他人を、世界と分離した存在として発見したのである²⁷。

では、個人として世界（他者、神、自然）から切り離された人間はどうなるのだろうか。エデンの園の東にケルビムと回る炎の剣が置かれ、アダムとイヴが再び樂園に戻れないように（創世記3：24）、一旦崩壊した中世的体制へ戻ることは出来ない。しかし、エデンの園における世界（他者、神、自然）との一体感、また中世的体制が与えていた安定感や帰属感を取り戻したいという欲求から人間は逃れることもできない²⁸。人間は自由になったが、孤独で孤立しており、他者や世界との一体感も失い、「自己の無力さと頼りなさ」²⁹に打ちひしがれ不安に苛まれているのである。

2-3 尊厳の喪失

墮落以降のアダムとイヴは、互いへの尊敬をもはや示さなくなった。恐らく性的な意味では互いに欲したであろうが、一時的に満たされたとしても、それは真に分離を癒すものではない³⁰。肉体的結合は「人間の疎隔（estrangement）を癒すことはない」³¹のである。個人となった二人は、愛し合う術を持たず、他

²³ 墮落以前のアダムとイヴは互いに総体として直面したが、恥ずかしいとは思わなかった。何故なら、彼らはお互いを切り離された個人としてではなく、〈一体〉として体験したためである。（Fromm, [1976], p. 109. = 訳書、169-170頁。）このことから、墮落以前は一体であったアダムとイヴの意識が、墮落以降個人として切り離されたことが分かる。

²⁴ Fromm, [1957], *op. cit.*, pp. 8-9. = 訳書、26-27頁。

²⁵ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 37. = 訳書、56頁。

²⁶ *Ibid.*, p. 35. = 訳書、53頁。

²⁷ *Ibid.*, pp. 38-39. = 訳書、56-57頁。

²⁸ Fromm, [1957], *op. cit.*, p. 8. = 訳書、25頁。

²⁹ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 54. = 訳書、71頁。

³⁰ Fromm, [1957], *op. cit.*, p. 7. = 訳書、24-25頁。Fromm, [1976], p. 109. = 訳書、170頁。

³¹ Fromm, [1976], *op. cit.*, p. 109. = 訳書、170頁。

者を「世界の中に住む見知らぬ人 (stranger)」³²として見なす他ない。

アダムとイヴの一体感が崩壊し相互の疎隔を経験したのち、彼らは各々の言葉や態度で互いを理解し、この分離を克服しようとしたのではないか。その様子は創世記3章に描かれてはいないが、フロムは「分離の罪は不服従の行為ではないので許される必要はないが、それは癒される必要がある」³³と述べており、アダムとイヴが陥った分離の孤独は癒されなければならないと主張する。内的であれ外的であれ、何らかの疎隔を克服する方法の試みがなされなければならないようなニュアンスである。けれども、どれほど互いの意識を隔てる壁を打ち破ろうとも、はたまた理解し合おうとも、彼らは決して元のような一体感を得ることはない³⁴。個人となった人間が完全に理解し合うことはないからである。これこそが、分離によってもたらされる絶望と無力感である。だからこそ、再び一体感を得たいという欲求は膨らみ、集団に同調し個人としての自我を埋没することによって、孤立を克服しようとする。「習慣においても、服装においても思想においても、集団に同調すれば私は救われる」³⁵のである。一度個性化の道を歩み始めたにもかかわらず没個性化を望むことは、エデンの園への回帰を意味する。それは個人としての自由の獲得を諦めることであり、エデンの園での神への絶対的服従に代わり、集団に服従することを意味する。対象は異なっているが、自由のない服従という点で両者は共通している。

一方、宗教改革の教義で何が新しいものであったかを理解するには、中世の教会神学の本質がどのようなものであったかを考えなければならない³⁶。フロムは、カトリック教会の精神と宗教改革の精神とを「人間の尊厳と自由の問題において、また自分の運命に対する人間の行為の効果について、本質的に異なっていた」³⁷と捉えており、両者が人間の尊厳という問題について異なった考えを持っていたと主張する。中世末期に至り、資本主義の発生は、独立と創意とを増大させたが、それは中産階級 (the middle class) には大きな脅威であった。中産階級の中で最も成功したものですら、大資本家と比べれば、その富も権力も物の数ではなかったのである。16世紀の初め、彼らはまだ新しい自由から多くの力と安定とを得ることはできなかった。自由は力と自信よりも、むしろ孤独と個人の無意味さをもたらした³⁸。

このような中でルターは、彼が説教していた社会階級の中に広まっていた無意味感に一つの解決策を提供した。自分の無意味さを認めるだけでなく、自分を徹底的にないものとし、個人的意思を完全に捨て去り、個人的力を徹底的に拒絶し告発することによって、人は神に受け入れられることを希望できるのである。ルターの神に対する関係は、完全な服従であった³⁹。

もし汝が完全に服従し、自らの個人的な無意味さ (nothingness) を認めるならば、そのとき、全能の神は喜んで汝を愛し、汝を救おうとするであろう⁴⁰。

こうしてルターは人々を教会の権威から解放したが、一方では、人々をさらに専制的な権威に服従させた。すなわち神である⁴¹。神はその救済のための本質的条件として、人間の完全な服従と、自我の滅却とを要

³² Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 121. = 訳書、163頁。

³³ Fromm, [1976], *op. cit.*, p. 110. = 訳書、171頁。

³⁴ このような分離を克服して得る調和を、フロムは「新しい調和」(Fromm, [1966], *op. cit.*, pp. 122-123. = 訳書、165頁。)と呼んでいる。それは、過去へと後退し、元の調和を得ることは有り得ないことを意味している。

³⁵ Fromm, [1957], *op. cit.*, p. 10. = 訳書、30頁。

³⁶ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 59. = 訳書、77頁。

³⁷ *Ibid.*, pp. 59-60. = 訳書、78頁。

³⁸ *Ibid.*, pp. 69-70. = 訳書、88-89頁。

³⁹ *Ibid.*, p. 70. = 訳書、89頁。

⁴⁰ *Ibid.*, p. 70. = 訳書、89-90頁。

⁴¹ ここでの神はエデンの園における神話上の神とは異なり、フロムが多くを語ることはない。しかしまた、絶対的服従とい

求した。ルターの「信仰」は、自己を放棄することによって愛されることを確信することであった⁴²。

ルターによる新しい宗教は、確実性への保証を与える存在への絶対的な服従を説いた⁴³。経済的問題に関するルターの見解は、典型的に中世的であったため、近代資本主義的な「人間の生活が経済的目的のための手段とならなければならないという思想」⁴⁴を嫌悪してははずである。ルターの時代になされた神に対する個人の無価値の強調は、時代の経過と共にその対象を変えることとなった。すなわち、近代においては、世俗的権威や経済的成果に対する個人の無価値という構造になってしまったというのである。宗教的権威が薄れ神という縛りが無くなったものの、服従と個人の無価値という構造は残り、近代以降の人々を「経済的成果という目的のためにもその生活を従属させなければならないという方向」⁴⁵へと導いたのであった。これこそが、ファシズムの下地となったのである。プロテスタンティズムは個人の無価値を強調しながらも、個人の自由と責任を強調してきたが、近代の権威主義的体制は個人の無価値に焦点を絞った⁴⁶。つまり、エデンの園や中世的体制は人間の尊厳や価値を認めたのに対し、近代の権威主義的体制は徹底的に否定したという点で異なっているのである。

2-4 罪の意識

これまでの考察から、アダムとイヴの物語を中世封建社会から近代における個性化の過程と符合させることで、「本源的調和」⁴⁷が失われ孤独に陥った歴史的過程が、近代のファシズムの形成と関わっていると、フロムが主張していることが分かった。そして、この過程によって失われたのが、個人の尊厳や価値であるというのである。アダムとイヴの物語は、「精神的 (intrapsychic) であるだけでなく、対人的 (interpersonal) である」⁴⁸ことが分かる。つまり、中世—近代の問題もまた、精神の内面だけではなく対人間が重要なのである。ここで対人的事柄に注目すると、人と人が分離され、互いを尊重できなくなったことが問題だと思われる。

Hunt (2018) は、フロムの読みは倫理的意識の発達という点において明確になっていないと指摘する。倫理的意識の形成には、「破壊的になる人間の潜在性への気付き、そして償いへの必要性を認識すること」⁴⁹が必要であると述べる。アダムとイヴは自分たちが過ちを犯したと認めさせられ、そして楽園から追放されたのだとしており、彼らは自らが犯した過ちや潜在的な罪を神によって自覚させられたというのだ。アダムとイヴはこのような自覚を通し、倫理的意識を形成できるのである⁵⁰。その点、フロムはアダムとイヴが神に反逆したことに対して自責の念を持つてであるとか、自身の罪悪を認識するといったことは一切述べて

う点では両者は似通っているが、個人の無価値を強調するという点でエデンの園の神とは異なっていると言える。

⁴² *Ibid.*, p. 70. = 訳書、90頁。

⁴³ カルヴァンの支持者もまた、主として保守的な中産階級であった。中には成功した者もいたが、全体的には資本主義の発生によって脅かされていたのである。このような階級に対し、カルヴィニズムは自由を表現したが、一方で「完全な服従と徹底的な自我の否定によって、個人が新しい安定を待ち望める」(*Ibid.*, p. 75. = 訳書、95頁。)と教え、個人の無力さの解決を示したのである。

⁴⁴ *Ibid.*, p. 72. = 訳書、92頁。

⁴⁵ *Ibid.*, p. 72. = 訳書、92頁。

⁴⁶ Fromm, Erich, and Funk, Rainer. *Love, sexuality, and matriarchy: about gender*, New York: 1st Fromm International ed./Fromm International Pub, 1999, p. 173.=『愛と性と母権制』滝沢海南子・渡辺憲正訳、新評論、1997、94頁。

⁴⁷ Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 71. = 訳書、95頁。Cf. Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 28. = 訳書、43頁。Fromm, [1963], *op. cit.*, p. 28. = 訳書、126頁。

⁴⁸ Fromm, Erich. *The art of being*, London: Constable, 1993, p. 77.=『よりよく生きるということ』小此木啓吾監訳・堀江宗正訳、第三文明社、2000、175頁。

⁴⁹ Hunt, Janet. 'Psychological Perspectives on the Garden of Eden and the Fall in Light of the Work of Melanie Klein and Eric Fromm', *Pastoral Psychology*, vol. 67 (1), 2018, p. 40.

⁵⁰ *Ibid.*, p. 39.

いない。彼らは分離の苦しみを味わうことになる。そして、この苦しみは癒されねばならない。そこに、自責の念や、人間が根源的に抱える罪悪を認識し、それらを償うといった描写はない⁵¹。この点が、フロムのエデンの園の解釈において倫理的意識が発達されないと批判される原因である。

アダムとイヴの物語を個性化の問題から読み解く場合、重要なことは個人としての自我が芽生えたアダムとイヴが、互いを愛することができなくなったことである。個性化以前に戻ることはできないが、再び一体感を得たいという欲求からも逃れることはできない。そうして生じるエデンの園への回帰は、服従への回帰と自由の諦めを意味する。一方、中世的体制が与えていた一体感が失われ、人間は社会から孤立した。競争と創意に目覚めた有産階級が興り、意思と人間の努力の役割が強調されるようになる。しかし、中産階級は資本主義に脅かされ無力感と孤立感を深めた。このような時代に起こったプロテスタンティズムは、人々に神への絶対的な服従により救済の道を得るという教えを広めた。教会権威の低下と共に、神ではなく経済的な成果への服従となり、より大きな権威への服従という構造は残った。結果として、服従の精神—エデンの園への回帰—は近代におけるファシズムの下地を形作った。こうして、個人として自由を得た大衆が、自らの尊厳や個性を放棄し、より巨大な体制へ服従し、搾取され道具となることを容易にしたのである。権威主義的体制は、「個人は利己的だから、利己心を棄てて社会的精神をもった人間にならなければいけない」⁵²という主張を用いる。この場合、利己心は他者を搾取しても構わないという考えであるが、それは自己を愛する自己愛 (self-love) とは異なることを見逃している⁵³。自己を愛する人間は、他者を決して搾取しようとはせず、利用しようとしめない。そうした人間は、自身が肯定された存在であり、他者も同様に肯定された存在であるという認識を持っているため、他者を支配し服従させる必要に迫られないのである。また、自己の尊厳や生命がどれほど重要なものであるかを知っているため、他者の尊厳や生命も尊重する。そのため、利己的な支配や服従とは異なる方法で、他者と関係を結ぶことが出来るのである。

このように、自己や他者の尊厳を認めることは、罪悪感とは異なる形で倫理的発達へと寄与することが出来ると考えられる。人間の倫理の発達に影響するものは様々であろうが、「民主主義が成し遂げていないことは、個人に自分自身を愛させること、すなわち個人の知的・情動的・感覚的潜在能力の全てを使って個人の自己に対する深い肯定感をもたせること」⁵⁴なのだとするのであれば、まずは各人が自己に対する深い肯定感を持ち、互いの人格、尊厳、価値を尊重し合うことがフロムの「愛」の概念なのではないか。

3. 結び

フロムはアダムとイヴの物語だけではなく、モーセの十戒やアブラハムの物語についても頻繁に言及しているが、中でもエデンの園の解釈に注目が集まっている。神学の分野である旧約聖書というテキストを心理学的に解釈することに、どのような意義があるのだろうか。これに対し、Dietrich (2015) はフロムの心理学的解釈が神学的研究に貢献できると主張しているが⁵⁵、フロムの解釈が聖書研究に引用されることは稀であるため、この主張は筋違いであると言えよう。代わりに Ellens (1997)⁵⁶は、この物語をどのようなレベル (文学や神学など) で扱おうとも「喪失、分離、依存、間主観性、脆弱、恥、そして欲求といっ

⁵¹ 人間は楽園から追放されたからこそ成長できるのであり、十分に成熟した個人として新たな調和を手にすることが出来るのである。Fromm, Erich. *The heart of man : its genius for good and evil*, New York: American Mental Health Foundation, 2010 [1964], pp. 15-16. 『悪について』 渡会圭子訳、筑摩書房、2018、15頁。

⁵² Fromm, 1999, *op. cit.*, p. 194. = 訳書、116頁。

⁵³ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 100. = 訳書、132頁。

⁵⁴ Fromm, 1999, *op. cit.*, p. 194. = 訳書、116頁。

⁵⁵ Dietrich, Jan. 'Erich Fromm in Hebrew Bible Research: With a Side Glance at Religious Studies', in: R. Funk / N. McLaughlin (eds.), *Towards a Human Science: The Relevance of Erich Fromm for Today*, Gießen, 2015, pp. 259-279.

⁵⁶ Ellens, Jay Harold (1932-2018) 心理学者、及び神学者。ミシガン大学近東研究部研究員。

た精神分析的発達の理論の中心となる一連の主題が、この物語の中に内在する]⁵⁷と、心理学的観点からアダムとイヴの物語を検討することで人間本性の根源を探求する姿勢を示す。

フロムによるアダムとイヴの物語の解釈で重要なテーマは、自然からの脱却、人間の歴史の始まり、そして個性化である。「個人がその原始的な絆から次第に脱出していく過程は—それは「個性化」の過程ともいえよう—宗教改革から現代までの近代史において、その頂点に達したと思われる。」⁵⁸と述べているため、宗教改革—近代という歴史の過程こそが、フロムの解釈における個性化の在り方を決定付けたものであるということが読み取れる。そこで、本稿ではアダムとイヴの物語を、宗教改革—近代という歴史の過程と符合させることで、その意味を検討してきた。

フロムの楽園追放解釈は、人間の本性とどのように関わるのだろうか。アダムとイヴは互いに向き合ったが、まだ愛し尊重し合う術を持たなかった。にもかかわらず、再び一体感を得たいという欲求からは逃れられない。エデンの園への回帰を求め、確実性への保証を与える絶対的な存在へと服従し、自己を無力で無価値なものとする。個人の成したものは権威主義的体制に帰し、個人の尊厳は認められない。

しかし、それはその人が自立していないということを意味します。彼らは自己肯定の地点にまで到達していないのです。自分自身の位置づけに達していないのです⁵⁹。

個人が容易に巨大な体制に服従し自己を放棄するのは、個人が深く肯定された存在であるという認識の欠如でもある。自らの内なる尊厳や生命を知る者は、他者の内にも同様のものがあることを知り、決して他者の尊厳や人格を粗略に扱うことはないであろう。それはまた、全人類が神から肯定された存在であるという旧約聖書の主題の一つとも繋がってくる⁶⁰。このようなフロムの解釈は、罪悪感と償いとは異なる形で、倫理的発達に寄与できるのではないか。

《文献表》

- Burston, Daniel. *The legacy of Erich Fromm*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991. = 『フロムの遺産』佐野哲郎・佐野五郎訳、紀伊国屋書店、1996。
- Dietrich, Jan. 'Erich Fromm in Hebrew Bible Research: With a Side Glance at Religious Studies', in: R. Funk / N. McLaughlin (eds.), *Towards a Human Science: The Relevance of Erich Fromm for Today*, Gießen, 2015, pp. 259-279.
- Ellens, J. Harold. 'A Psychodynamic Hermeneutic of the Fall Story: Genesis 2:25-3:24: Through a Psychological Lens', *Pastoral Psychology*, 45 (3), 1997, pp. 221-236.
- Fromm, Erich. *The Fear of Freedom*, London: Routledge, 2001 [1942]. = 『自由からの逃走』日高六郎訳、東京創元新社、2013 [1951]。
- Fromm, Erich. *Psychoanalysis and Religion*, New Haven: Yale University Press, 1978 [1950]. = 『精神分析と宗教』谷口隆之助・早坂泰次郎訳、東京創元社、1987 [1953]。
- Fromm, Erich. *The Sane Society*, London/New York: Routledge, 2002 [1956]. = 『正気の社会』加藤正明・佐瀬隆夫訳、社会思想社、1958。
- Fromm, Erich. *The Art of Loving*, London: Thorsons, 1995 [1957]. = 『愛するということ』鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991。
- Fromm, Erich. *The Dogma of Christ*, Abingdon, Oxfordshire: Routledge, 2004 [1963]. = 『革命的人間』谷口隆之助訳、創元新社、1970 [1965]。
- Fromm, Erich. *The heart of man : its genius for good and evil*, New York: American Mental Health Foundation, 2010 [1964]. = 『悪に

⁵⁷ Ellens, J. Harold. "A Psychodynamic Hermeneutic of the Fall Story: Genesis 2:25-3:24 Through a Psychological Lens." *Pastoral Psychology*, 45 (3), 1997, pp. 221-236.

⁵⁸ Fromm, [1942], *op. cit.*, p. 20. = 訳書、34頁。

⁵⁹ Fromm, Erich. & Funk, Rainer. *The Art of Listening*, New York: Bloomsbury, 2009, p. 71. = 『聴くということ：精神分析に関する最後のセミナー講義録』堀江宗正・松宮克昌訳、第三文明社、2012、115-116頁。

⁶⁰ Fromm, [1966], *op. cit.*, p. 63. = 訳書、85頁。

- ついて』渡会圭子訳、筑摩書房、2018。
- Fromm, Erich. *You Shall Be As Gods*, New York: H. Holt, 1991 [1966]. = 『自由であるということ』飯坂良明訳、河出書房新社、2010。
- Fromm, Erich. *The Revolution of hope : toward a humanized technology*, New York: American Mental Health Foundation Books, 2010 [1968]. = 『希望の革命：技術の人間化をめざして』作田啓一・佐野哲郎訳、紀伊国屋書店、1969。
- Fromm, Erich. *The anatomy of human destructiveness*, New York: Holt, 1973. = 『破壊：人間性の解剖』作田啓一・佐野哲郎共訳、紀伊国屋書店、1975。
- Fromm, Erich. *To Have or To Be?*, Toronto: Bantam Books, 1982 [1976]. = 『生きるということ』佐野哲郎訳、紀伊国屋書店、1977年。
- Fromm, Erich, and Rainer Funk. *Love, sexuality, and matriarchy : about gender*, New York: 1st Fromm International ed./Fromm International Pub, 1999. = 『愛と性と母権制』滝沢海南子・渡辺憲正訳、新評論、1997。
- Fromm, Erich. & Funk, Rainer. *The Art of Listening*, New York: Bloomsbury, 2009, p. 71. = 『聴くということ：精神分析に関する最後のセミナー講義録』堀江宗正・松宮克昌訳、第三文明社、2012、115-116頁。
- Hunt, Janet. 'Psychological Perspectives on the Garden of Eden and the Fall in Light of the Work of Melanie Klein and Eric Fromm', *Pastoral Psychology*, vol. 67 (1), 2018, pp. 33-41.
- Kille, D. Andrew. *Psychological Biblical Criticism*, Minneapolis: Fortress Press, 2001.
- Lundgren, Svante. *Fight against idols : Erich Fromm on religion, Judaism, and the Bible*, Frankfurt am Main/New York: Peter Lang, 1998.
- Schimmel, Noam. 'Judaism and the Origins of Erich Fromm's Humanistic Psychology: The Religious Reverence of a Heretic', *Journal of Humanistic Psychology*, 49 (1), 2009, pp. 9-45.